



教皇様の赦

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1990

発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

《聖体》 神が教会に与える 最高の賜

今日、教会は聖体に感謝を捧げます。シオンとエルサレムがいにしへの契約に感謝を捧げたように、教会は新しい永遠の契約である至聖なる秘跡を感謝します。

十字架と復活という過越の秘義を通して神がキリストにおいて与えられた最高の賜・聖体に感謝を捧げます。

教会は聖木曜日最後の晩餐の賜に感謝を捧げます。裂くパンと祝別の杯が私たちに与えられたことに感謝します。実にこのパンはキリストの御体に与ることであり、この杯はキリストの御血に与ることです。(コリント⑩・16、17参照)

祝祭日であるかないかを問わず、いつの日も止むことなく私たちがキリストに与らせてくださる秘跡に、教会は感謝します。かつて、弟子や

神の言葉を受入れ神の教えに従った全ての人々に御自分を与らせたように、キリストは今日、私たちにも与らせてくださいます。

私たちがために(生きるパン)となられたキリストを通して、教会は感謝します。このパンを食する人は誰でも永遠の生命が与えられます。(ヨハネ6・51参照) 教会は、永遠の生命、神的生命であるパンとぶどう酒に感謝を捧げます。

この秘跡にこそ人間の生命の充満があります。神の懐における生命の充満です。

「人の子の肉を食せず、その血を飲まなければ、あなたたちの中には命がない。私の肉を食べ私の血を飲む者は、永遠の命を有し、終わりの日にその人々を私は復活させる。」(ヨハネ6・53、54)

これは目に見える世界、つかの間の現世を歩む旅路の秘跡です。現世のはかなさは死なねばならないということ(死の必要性)によってはっきりしています。この死は神意による人間の宿命であり、目には見えませんが、目に見える現世よりは本物の世界に到達するため不可欠です。

というわけで、教会が今日祝う聖体の祭は典礼を通して、モーセに率いられて荒野を旅した旧約時代の人のことになっていきます。

モーセが人々に向かって言います。「おごり高ぶるな。おまえをエジプトの地の奴隷の家から連れ出された神なる主を忘れるな。(…)ずっとおまえを導き、堅い岩から水をほとばしらせ、おまえの先祖も知らなかったマナを荒野で食べさせてくださった」と。「忘れるな」(第二法8・14、16)

「神なる主がこの四十年の間おま

えたちに荒野を歩かせたその旅を思い出せ。それはおまえたちをへりくだらせ、試し、おきてを守るか守らないか、その本心を知ろうとされたからであった。(…)それは人間とは

口から出るすべてのものによって生きるものであることを教えるためであった。(第二法8・2、3)

モーセの言葉は、イスラエルの人々、旧約時代の人々に向けて語られています。しかし今日のミサでこのモーセの言葉にふれるとするなら、それはモーセの言葉がそのまま、今日の私たちに、新約時代の人々に、教会(…)に向けても語られているということになります。

「忘れるな」(…)

聖体は、キリストの十字架と復活を通して神が私たちに与えられた最高の、最大の賜です。「私を食べる者は私によって生きる」。私たちのために(生きるパン)となられたキリストにとどまることなしに、この世に生きることはできません。

聖体の秘跡は生命の賜です。このパンを食べる人は、誰でも永遠の命に生きるのです。

何百年何千年にわたって、今日祈りの言葉となって私たちに伝えられてきたモーセのこの「忘れるな」には、今なお新たに発見される意味があります。

「忘れるな」だれにとっても、この世は永遠の世ではありません。この世が全てであるような生き方はできません。神は存在せず、神御自身私たちが目的ではなく、神の国に入ることが人間の究極的使命では

なく、また決定的な神の召出しではない——このような考えに従う生き方はできないのです。

「私の肉を食べ私の血を飲む者は私に宿り、私もまたその者のうちに宿る」(ヨハネ6・56)とキリストは仰せられます。

キリストにとどまらずに、私たちがこの世で生きていくことはできません。

私たちは聖体なくしてこの世に生きることはできません。

聖体の秘跡の及ばない所で生きることはできないのです。聖体の秘跡は、もともと神の領域のもので、神によって人間に与えられたものです。

キリストは仰せられます。「生きてまします御父が私を遣わし、その御父によって私が生きてるように、私を食べる者も私によって生きる。」(ヨハネ6・57)

キリストの招きを受けましょう。

キリストのために生きましょう。キリストの他には、真に生きる道はありません。御父のみが生命を持っておられます。神の外では全ての被造物は消え失せ滅びます。神のみ生命なのです。

(…)キリストは、この世の墮落にもめげず、死すべき運命を担って私たちに真の生命へと導きます。キリストは私たちに生命を授け、その生命を私たちと分かち持ちます。

この生命の賜が聖体の秘跡です。「天から下ったパン」は、先祖が荒野で食べたが死んでいったパンとは違います。このパンを食べる人は誰でも永遠の生命に生きるのです。(ヨハネ6・49、51参照) (六・四)

若者たちへ

愛を語るキリスト

キリストは来られました。多くの...

しかし、キリストは病を癒したり...

互いに愛し合うなら、それによって...

皆さんはキリストの後継者です。...

ない。あなたたちは一人ぼっちで...

神の福音は(パン種のように)世...

パン種はさらによく混ざって、大...

これこそ、教会の使徒職が効果を...

ません。何かがなされる所ならどこ...

ます。一度それを掴んだら、どんな...

愛や死という人生における諸々の...

罪に対して戦いを!

福音の呼びかけに応じよう

「一人の罪人が悔い改めれば、...

いましょう。そして、聖者への多...

戦いは他方の悪(罪)に対する戦いと...

福音書の言葉は確かな希望の知ら...

ルヴェストリ師の没後二百年を記念...

本日の主の御言葉は、戦いの...

の言葉をもって主日の聖体祭儀を祝...

「いっそうの喜びがある。」こ...

私たちが今聞いたメッセージの中心...

「召しだし」(再版)

ホセ・ルイス・ソリア著 新田壮一郎訳 定価七〇〇円

説教・講話・書簡等の抄記

は(緊急に回心せよ)です。回心が示すもの、回心が想定する変化、回心が生み出す結果は、この朗読の種類の要素に示されていますが、中でも福音のたとえ話の父親の言葉によく表されています。「喜び合おう。私のこの子は死んでいたのでに生き返り、見失ったのに見いだしたからだ。」

3 回心の複雑な過程について考えていきます。人が回心する時、どういふことが起るのでしょう。まず、心を入れ替えさせる、すなわち、主に立ち返らせ、主を捜し求めるようにさせるのは、神です。神が心を動かされ、罪によって虐げられている人の方へ最初の行動を起されます。第一朗読にあるように「主は、民に下そうとされた災いを思いとどまられた。(脱出32・14)そして福音書では、御父の慈悲のかたどりであるイエズスのたとえ話の中で、(罰したくない)ことを教えられます。息子が父を捨てるとき、父は沈黙して息子が、その父は毎日息子を待ち続け、再び会えるのを待ちわびて遠い地平線を眺めているのです。これは回心の過程全体の最も素晴らしいところであり、神学的にも最も深い目的を示しています。主は、御自身に、約束に、救いの計画に、契約に、忠実ですから、罪人に心を向けられます。主はどんなに大きな罪であろうとも、罪の勝利を認められることはありません。主は愛に忠実であり続けられます。「父性の愛に忠実、今まで息子に注いできた愛に忠実です。」(回勅「慈しみ深い神」6)

このように主は、和解の真の主役です。愛する人々のところへ自ら走

っていくこと、御自分が率先なさることこそ主の望みです。そうして人は、失ってしまったものを数多く取り戻すのです。モーゼが祈りの中で訴えたのも、主の代償を求めぬ愛であったのです。「あなたのしもべ、アブラハム、イサク、イスラエルを思い出して下さい。あなたは彼らに対して、自身にこう誓われたではありませんか。」(脱出32・13)「自身に」すなわち主の聖性と無限の偉大さ、聖なる父性の永遠の存在からあふれ出る慈愛の強さにかけて。

4 回心あるいは立ち返りは主の導きによるものです。(…)主の導きの中には、徐々に内的変化を理解させることが含まれていますが。人は失ったものの重要性を徐々に再発見し、深く致命的な貧窮に次第に気づいていきます。「私はここで飢え死にしようとしている。(ルカ15・17)

放蕩息子の行いにはつきりと表れているように、罪とは神への反抗、そこまで言わないとしても、神の愛への無関心や怠慢です。命令に背くようなひどい行いは、主との関係を壊し、主から離れてしまうことになりす。つまり、主を拒むことによって自分にとってかけがえのない御方から離れてしまうのです。「弟は自分のものをみな集めて遠国に行き、そこで放蕩して財産を使い果たしてしまつた。(ルカ15・13)

まじい欠乏の状態に在ることによりやく気づき始めます。そして、自由の身であったのに、その地方の人の召使いとして雇われたのです。人生の根源である主から遠く離れることは、有害な選択であることが明らかになります。人の存在の深みにすでに入りこんでいる死、深い動揺と悲しみ、希望のない不満足、現在の生き方に対する欲求不満に陥ることになるからです。人はホームシックにかかり、もとに戻りたいと考え始めます。「出発しよう。父のところに帰ろう。(ルカ15・18)父との愛の力を信じる息子は、恐れではなく愛に支えられて、困難をものかえりみず、故郷へと旅立ちます。

私たちは、主の父性の慈愛について黙想しています。(…)若さとは想像力と計画をもって未来に進んでいくことを意味します。若者が選ぶ道には、重大な責任が伴ってきます。個人と共同体の未来がそれらにかかっているからです。若い皆さん、終わろうとしている20世紀のよりよい部分——現代を特長づける正義と一致、自由、平和への関心を選ぶか否かは、あなたの方次第です。今の若い世代と未来の世代にとって本当に役立つ結果を引き出すか否かは、あなたの方次第なのです。これができるため、あなた方は信仰と宗教の価値を無視したり、正直な心、他者への尊敬、責任でもある

5 私たちは、主の父性の慈愛について黙想しています。(…)若さとは想像力と計画をもって未来に進んでいくことを意味します。若者が選ぶ道には、重大な責任が伴ってきます。個人と共同体の未来がそれらにかかっているからです。若い皆さん、終わろうとしている20世紀のよりよい部分——現代を特長づける正義と一致、自由、平和への関心を選ぶか否かは、あなたの方次第です。今の若い世代と未来の世代にとって本当に役立つ結果を引き出すか否かは、あなたの方次第なのです。これができるため、あなた方は信仰と宗教の価値を無視したり、正直な心、他者への尊敬、責任でもある

人ひとり聖別され、自分に委ねられた人々への奉仕という聖務に全てを捧げます。司祭のこの奉仕は、信者一人ひとりにとってまことに基本的な権利ですから、八一年一月三十一日にローマの聴罪司祭に申し上げたことは時宜にかなったものと思えます。「私が強調したいのは、人から奪うことのできない個人的な権利が奪われないように、現代社会は嫉妬深いと言えほど注意して見つめているということ。それならば、人間の最も神秘的で神聖な、神との出会いのこの領域で、聖職者を通じて実現する個人的で比類のない神との語り合いを否定することなどできるでしょうか。神の御前に貴重な存在である信者に、恩寵の素晴らしい実りである非常に深く、真に個人的な喜びを拒むことができるでしょうか。(Insegnamenti IV, 1, 1981, p.193)

神との個人的な語り合い — 赦し —

私はローマの司教・ペトロの後継者として、司祭及び司祭になるべく準備している方々にお願ひします。どうか償いと和解と平和の職務に、常に、忍耐強く、挺身してください。神は「キリストによって私たちを自分と和睦させ、和睦の役目を私たちにゆだねられた。(…)神が私たちを通してあなたたちに勧められるのであるから、私たちはキリストの使者である。キリストによって切に願う、神と和睦してとどまれ。(コリント②5・18、20)

私たちが生命で満たす神の赦しという泉・ゆるしの秘跡に

貢献させる忍耐力の源は(キリストの愛)です。「生きる人々が、もう自分のためではなく自分のために死んでよみがえった御方のために生きるため(前出5・15)」と記されている、その御方の愛なのです。このように、司祭には、霊的に死んだ人に神の生命を回復させる使命があります。司祭とホスチア、すなわち司祭であるイエズスと御聖体の聖なるホスチアとともに、秘跡である告解を聴くとき、司祭も自ら犠牲のささげもの、そして復活の証人とならなければなりません。叙階を授ける司教の按手によって、司祭は一

「拓」

ホセマリア・エスクリバー著
新田社一郎訳 定価一六四八円

不変の教え

一般告白と一般赦免は司祭の物理的、そしておそらく心理的な負担を軽くしてくれることでしょう。しかし、教会の重大な、良心を拘束する規則に違反すれば、司祭は信者を欺くだけでなく、贖われた人ひとり一人の価値を証する自己犠牲という功德を司祭自身が得られなくなり、一人ひとりに時間を割き、心を配り、寛大でなければなりません。しかもこの寛大さは、共同体的な面だけでなく、まさに神学的な意味で一人ひとりの人間の無二の独自性と尊厳という面、そして個人的で秘密の語らいというデリケートなうちあけ話の中で発揮されなければなりません。

◆ 赦しの秘跡の中で罪を告白し、赦免を受けることによって、神と、そして教会との和解が成立します。今、開かれている内教院の講座で取り上げられる議題は、赦しの秘跡と内的法廷全般に関する教会法上の規律ですが、とりわけ二番目について考察されることでしょうか。注意深く考えていただきたいのですが、譴責と不適格、罰あるいは予防としての他の定めに関する教会法上の規律は、形式的な法律(尊重)主義によるものではなく、靈魂を癒すために適用される悔悛者への慈愛の現れなのです。譴責が(薬効的)と言われるのはこのためです。

聖なる善が奪われれば、それが刺激となって痛悔と回心に向かいます。また、誘惑にさらされている人への警告となります。それは又、教会として教会を通して与えられる秘跡という贈物、即ち主が私たちに残された霊的な遺産に対して、敬いと愛を

示すことなのです。内教院が聴罪司祭にあてた文書で述べていることは単なる偶然ではありません。「教会の最も貴重な善(財産)は教会の中心にありますし、またそこになければなりません。それらに関する教理がたえず教えられ、司教的注意が払われなければなりません。そうするだけでなく、教会法上の保護もなされなければなりません。なぜなら

罪は人間と神との契約を破る 「罪」シリーズ ⑦

1 このシリーズのカテケージスにおいて、私たちは絶えず原罪に関する真理を念頭におき、同時に人類史の全時代にわたる罪の実体的体験は、啓示の示すものを確認しているということが出来ます。罪は一人ひとりの生活の中に絶えず存在しています。人間の知識では罪は倫理的悪として存在し、倫理学(倫理哲学)がより直接に関係するものです。しかし、心理学、社会学のような記述的性質をもった人文学の他の分野も、それぞれ独自の方法で罪と関わりをもっています。確かなこと

うすべきなのですか。とりわけ大切な理由は、これら善(財産)にこそ教会の神秘的な交わりが存在するからなのです。従ってこれらの善を軽んじたり、不正に利用したりすれば、教会の神秘的な交わりが害をこうむることになるのです。

◆ (一) 赦しの秘跡を授けるときに私たちが込める愛には、過越の意味が含まれています。その

理(悪)の全き本質を十分に認識したり、適切に表現したりすることはできないということを確認しなければなりません。信仰を通して神との関係を背景にしてでなければ、罪の実体を余すところなく理解することはできません。ですからこの関係に於いて罪の理解を発展させ深めるように努力しましょう。

啓示、特に聖書の場合、その中に含まれている罪についての真理は、罪そのものの「発端」に立ち帰ることなしには示されません。ある意味では一人ひとりの人生に属する「自罪」でさえも、あの「発端」、人祖のあの罪と関連させてはじめて十分に理解できるようになるのです。これはトリエント公会議のいう原罪の結果、「罪の火花」が人間の自罪の上位であり源であるのみならず、人祖の「最初の罪」があるていど残って、人間一人ひとりが犯すすべての罪の

意味を思い出しましょう。そうすれば私たちの兄弟姉妹の霊的な復活が繰返されるでしょう。「おまえのあの弟は、死んでいたのに生き返り、見失ったのに見つけたのだから、祝い喜ぶのは当然なはずである。(ルカ15・32) 回勅「いつくしみ深い神」のなかで赦しの神学と呼べるものを示しました。そこから、和解の秘跡がもつ過越の意味が出てくるのです。

3 第二バティカン公会議は「人間は神によって義の中におかれたのであるが、悪霊に誘われて、歴史の初めから、自由を乱用し、神に對立するものとなり、自分の完成を神のほかに求めた」(『現代世界憲章』13)と述べ、人祖が原初的義の中で犯した罪について論じています。けれども人類が引き継いだ倫理的弱さの結果として、歴史を通して犯してきた罪は全て等しく、このような本質的要素を反映しています。実際に個々の人間の行為として理解されるどの罪も全て、特殊な「自由の乱用」、自由あるいは自由意志の悪用を含みます。人間が創造主の意向に反して自由意志を用いる時、態度で、神に對立する時、「自分の完成を神のほかに求め」る時、被造物たる人間は自由意志を乱用しているのです。

4 人間の犯すどの罪にも常に本質的な要素は存在しているの(次号に続きます)

「過越しの秘義は、愛を示し、与えることで絶頂に達します。それによって人びとを善に立ち返らせ、正義を回復させることができるのです。」(7番) 贖い主の御母、教会の御母、罪人の拠り所になります聖母マリアに皆さんを委ねます。そして父としての祝福をお送りします。(三・三十一、内教院及びローマ四大聖堂の聴罪司祭へ)

です。神と人間について啓示された真理にてらしてみると、この要素は初めから罪という倫理的悪を構成しています。それは原初的義の中で犯された最初の罪のそれとは違った強さで示されるものです。原罪後に犯された自罪は、ある意味ではその出发点において受け継いだ悪への傾き(悪い欲望の火花、誘惑)の状態によって決まるものです。けれども、弱さを受け継いだからといってそれが人間の自由を取消すことになるわけではありません。従って(個人の犯す)自罪には全て、神の意志に對する真の意味での自由の乱用があります。この乱用の程度は多様であり、その多様さに従って罪人の罪の程度も変わります。ですから自罪を測るには異なった尺度を適用しなければなりません。その際、自罪の中に含まれる悪の程度を検討するという問題が生じます。このことから「重大な罪」と「小罪」との差異も出ます。重大な罪とは「永遠の死を招く」大罪のことです。なぜなら、大罪はそれを犯した人に成聖の恩寵を失わせ、失ってしまうからです。

2 しかし同時に、啓示の助けなしに罪(あるいは罪という倫

「モデル」となっているからです。最初の罪は、罪そのものとしては個人的な罪でもありません。従って人間の他の罪のどれをとっても、最初の罪を「組み立てているもの」の個々の要素がその中に見つかります。

「最初の罪」があるていど残って、人間一人ひとりが犯すすべての罪の

「モデル」となっているからです。最初の罪は、罪そのものとしては個人的な罪でもありません。従って人間の他の罪のどれをとっても、最初の罪を「組み立てているもの」の個々の要素がその中に見つかります。

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部八十円 送料実費
 ■一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要
 郵便振替 3-72393